

請 願 文 書 表 (令和6年11月28日定例会提出)

請願第11号

若草中学校区における学校規模適正化計画に関する請願 (行財政改革及び公共施設等検討
特別委員会付託)

令和6年11月6日受理

請 願 者 ●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
小 川 優 子 外2名
紹介議員 宮 池 明

要旨

当事者である児童や保護者、地域住民との合意形成がなされないまま強引に推し進められている現在の学校規模適正化計画に反対します。

計画の推進に際しては正確に合意形成がなされるべきであり、計画は我々の声を反映したものであるべきと考えます。まずは地元と協議を重ねながら現在の学校規模適正化計画を一から見直し、作成し直すよう求めます。鼓阪小学校在校生児童並びに卒業生、保護者、鼓阪地区の声を無視しないでください。

理由

①2014年に端を発した「鼓阪地区地域活性化案」の話が中断した状態である。

2019年7月14日に若草公民館において、仲川市長、教育長、地域自治連合会長、鼓阪小学校PTA会長、地域住民で行われた地域ミーティングにて、鼓阪地区から提示した地域活性化案資料（鼓阪幼稚園跡地を鼓阪小学校と連携して活用し自治協議会がまとめる方式や、リノベーションによる空き家の有効活用を収益事業につなげる明確なアイデア等を盛り込んだもの）を中心に具体的な話し合いが行われた。それを受けて「（その案は）壮大で魅力的な提案である。地域の皆さんに知恵を出してもらってプランニングができればと思うので別途個別に相談したい。担当部署を通して後日連絡をする。」と仲川市長からじきじきにお話をいただいた。

しかし、その後の市の対応として行われたのは、上記地域ミーティングの約3か月後である同年10月21日に市役所・副市長室にて副市長と市幹部、鼓阪連合会、地域市議会議員のみでの会合開催であった。この会合に加え、2020年3月23日に開催された「第1回学校規模適正化問題会議」に、鼓阪小のPTAが参加を打診されることはなく（理由は不明）、鼓阪小PTAが正式に市側から受けた連絡は、当初の地域ミーティングから36か月経過した2022年7月4日のことであった。しかもその内容は、「学校規模適正化により鼓阪小学校と佐保小学校を統合し、現佐保小の敷地内に新しい小学校をつくる」という唐突かつ一方的な通達であった。

当然のことながら、これにより鼓阪地区の住民や鼓阪小学校児童ら、保護者たちは混乱に陥っているが、市側からの十分な説明や歩み寄り、合意形成のための機会はなく今日に至っている。

②「学校規模適正化検討協議会」の在り方と、鼓阪小PTAが不参加にもかかわらず協議会

会議を継続して開催している。

2024年2月17日に立ち上げられた「鼓阪地区学校規模適正化検討協議会」であるが、第1回目の会議から「統廃合ありき」で進行されている。第3回目の学校規模適正化検討協議会において、鼓阪小PTAが「児童、保護者、地域住民からの合意が得られていない状況なので統廃合についてはもう少し丁寧に進めてほしい」旨を訴えたところ、協議会側は「統廃合は既に決定しており議論の余地はない」と主張したため、鼓阪小PTAは、「子供たちのよりよい教育環境を整えるための公平公正な協議が行える場として整うまでは参加を控えざるを得ない」という旨の文書を教育委員会及び自治連合会長、鼓阪小校長宛てに提出。以降、協議会側、教育委員会側からの正式な返答がないまま、第4回目の協議会は「若草中学校区新小学校準備委員会」と名称を改め、依然「統廃合ありき」の図式で進めようとしている。

③市側からの「説明会」と称した集まりは、終始一方的な説明や報告、通達にとどまり、当事者（鼓阪小児童をはじめとする、保護者や鼓阪地区住民など）の意向や意見、要望を「真摯に受け止めている」とは程遠い状況である。

今までに、市の主催による鼓阪地区住民（保護者や児童も含む）へ向けての説明会が数回開催されたが、ことごとく「一方的な説明」ととどまっている。直近の2024年10月23日午後6時30分より鼓阪小講堂にて行われた説明会については、開催日時の事前調整がなく決め打ちの日時での開催であることに加え、会場へ足を運べない参加希望者のためにリモート等で中継してほしい旨を土田教育政策課長へ直接要望したが、「佐保小側からその要望が出ていない」などの不明瞭な理由で要望は却下された。また、説明会の開催告知方法についても、保護者用連絡アプリ、さくら連絡網を利用し在校生保護者のみに通達され、その他の地域住民には市から正式に開催の告知がなされることはなかった。兄弟児などがある家庭へ向けて「子供も来場可能である」との記載もなかったため、上記の旨を含めて追加で告知を行うように要望したが、これも却下された。今回以外の説明会においても多少の程度の差こそあれ同様の対応であり、「地域の声を聞く」姿勢である、またはあったとは言えない。

④令和5年（2023年）1月25日の時点で、奈良市教育委員会は「住民や保護者の声を聞きながら（適正化計画を）進めていく」と説明していたが、2024年9月25日の市議会分科会において、「令和3年（2021年）7月の時点で既に開校時期を令和8年4月と決定していた」ことが、教育政策課長の答弁で明らかになった。

一番最初に公に公開された説明会である令和5年（2023年）1月25日の時点より、市教委からは「現在の統廃合計画については“決定”ではない。地域住民の声を聞き、納得していただけるまで説明していく」等の説明が継続してなされてきた。しかし、既に最初の説明会の前年7月には開校時期が決定していたことが明るみになり、鼓阪小PTAをはじめとする地域住民は欺かれてきたことになる。

2024年10月23日の鼓阪小での説明会にて、北谷教育長より「（この計画は現在までに）合意のもと進められてきたと認識している」と発言があったが、鼓阪地区としては「合意である」という意思を正式に表明した経緯は一度もなく、さきの①の項目でも述べたが、この計画の当初に行われた会合や会議に対し、鼓阪小PTAに招集はなかったため不参加であり、検討協議会にも第3回目以降参加していない。この状況で「地元地域の合意があった」とは到底言えない。

また、2022年9月28日に教育委員会に提出している鼓阪小保護者対象のアンケート

をはじめ、2024年1月と5月に実施の保護者対象アンケートの結果、2024年9月6日に提出の「鼓阪小保護者主催による署名」1,206筆（現在は1,300筆）など、「保護者と地域の意向」は、その大多数からの「統廃合に反対、もしくは統廃合計画に疑問」という回答結果に明らかに反映されているものとする。

⑤学校規模適正化計画の方向性転換が行われた経緯が不透明である。

この統廃合計画の内容は、2016年の「学校規模適正化実施計画（後期計画）」公表当時に明記されていた「小中学校一貫校をつくる」もしくは「鼓阪小と鼓阪北小の統合」といった内容から、「鼓阪小と佐保小の統合」という内容に、事前の予告や説明なく変更されている。変更に至った経緯や理由について、納得のいく形で市民に明確に示す必要があると考える。

⑥通学路の危険性は解消されていない。

保護者や地域住民から説明会のたびに指摘されてきたが、それを受けた奈良市の安全確保のための施工として実施されたのは、既存のグリーンベルトの塗り直しとスクールゾーン30を設定するという内容にとどまっている。

2023年9月2日に鼓阪小学校講堂で開催された保護者向け説明会において、それでは依然不十分である旨を指摘した際の奈良市教育委員会からの回答は、「グリーンベルトがあれば、『100パーセント安全とは言い切れない』が『ある程度』安全性は確保されていると認識している。」という逆に不安をあおるものであった。

奈良市が提案している通学路の中でも特に問題となっているのは【一条通り】であり、この道路は学区内の東側から西側へ徒歩で通学する児童の多くが利用すると想定されている道路である。（この道路を使用しない通学路のルート設定は、大きく南側へ迂回することになったり、非常に人通りの少ない危険な道しかないことから設定は非現実的）。この一条通りの転害門交差点から法蓮中町の交差点までの約850mだけを見ても、奈良市が整備したと主張しているグリーンベルトは何か所も電信柱や側溝などによって分断されており、それ以外の場所でもろろろグリーンベルトがつながっている箇所においてもその横幅は狭く、特に狭い箇所では10cmを切っている箇所も数か所ある。これでは子供たちが安全に歩ける幅として十分に確保されていると言うには程遠い状態である。そして片側1車線のこの通りは狭い道幅でありながら、時間や曜日によって多少の違いはあるといえど、押しなべて車の交通量が多い。車だけでなく自転車や原付などの軽車両に加え、東側から育英高校、一条高校、若草中学校などに通う学生や、反対に西側から東側の県道754号線のバス通りまで歩く市民も多い。地域の企業や店舗の配達、近隣の介護施設等の送迎車も多く見られる。同じ一条通りの法蓮中町から西へ佐保小学校に向かう道路（約450m）の大部分については車道と歩道が鉄柵で区切られており、この歩道の幅はおおよそ70cmから90cmほどである。人と人はおろかベビーカーや老人車などが通行すれば対向はできないため、どちらかが鉄柵を超え車道に出て通行するという状況になっている。

現状でもかなり危険であるこの状況に加えて、登校する児童や送迎する車が増加する場合を想定、検証し十分な対策が講じられているとはとても言い難い。最低限の対策としても、この通りに面している住居や店舗のセットバックや、電信柱の地中埋め込み工事や側溝のグレーチングの整備などの対策を行い、通学する子供たちをはじめとする地域住民の安全性をまず確保するのが必須であるとする。

現在、代替案として教育委員会から提案のあった「ワゴン車による児童の送迎（スクール

バス)」についても疑問が残る。登校時と下校時の送迎車の本数は未決定であるが、登校時に限られた本数の発車スケジュールに合わせることになるのは、まずそれだけで既に児童や保護者にとって大きな負担となるだけでなく、体調不良などの理由で遅刻や途中下校することになった際には、保護者などによる送迎が必要となる。そして、下校時に際しては、学年によって下校時刻に差異があることに加え、児童がバンビーホームや放課後子ども教室に参加する場合においては下校時刻にさらにばらつきが発生する。なお、16時から17時まで（日没前の空が暗くなる前まで。季節により異なる）に自宅に到着していることを基本的ルールと定める放課後子ども教室の方針を鑑みると、小学校から自宅までの距離が一番遠い児童に送迎車の発車時刻を合わせる必要があるため、時間的な制約はさらに厳しくなる。

送迎車による通学方法がはらむ問題は深刻であり、通学距離による不平等や格差が生じるだけでなく、徒歩での通学時に生じるはずの、子供たちと地域の貴重な触れ合いの機会を奪うことになる。子供たちから徒歩で安全に通学する自由と権利を剥奪すべきでない。

⑦万が一この統廃合が遂行され鼓阪小学校が「廃校」となった場合の跡地利用について、奈良市は一切の予定や計画を公表していない。

鼓阪小学校校舎本館と講堂を合わせた総面積は約1,330平方メートル。瓦ぶきの講堂は昭和11年完成の純日本風を加味した鉄筋コンクリート造の建造物である。奈良市は、学校規模適正化計画において、万が一鼓阪小学校が廃校になった場合の跡地について、「まだ決まっていない」と方向性すら正式に公表していない。地域住民との合意形成を目指すのであれば、最低限この跡地計画についても公表すべきであると考える。

⑧校長をはじめとする、現在の鼓阪小学校の教育環境について

鼓阪小学校の保護者に初めて「鼓阪小と佐保小を廃統合し新しい小学校を造る計画」が知らされた2023年1月25日から現在までの約2年間の間に、児童たちの気持ちが大きく揺れ動いている。

市から通達された計画の進行方法があまりに強引で一方向的であることに加え、当初の教育委員会の説明では「この計画はまだ決定ではなく地域の声を聞きながら進めていく」と発言があったため、保護者ですら正しい進捗情報やどこにそれを確認したらよいのかなど、皆目見当がつかない状況であった。そのため、保護者の多くは、当の子供たちに「不要な不安」を与えることを避けるべく、正しい情報が届くまではこの計画の内容を伝えることに慎重になっていたが、その渦中にあった2023年9月1日、夏休み明けの全校朝会で吉元校長が児童に向け「鼓阪小学校はなくなりますが、悲しい気持ちは胸にしまって新しい学校でも頑張りましょう」という旨を発言。事前にPTA保護者に打診もなかったため、子供たちからの話でその内容を聞いた保護者から当時のPTA会長宛てに問合せが殺到した。

また、ほぼ同時期に当たる2023年9月19日には、保護者や児童に事前の確認や告知なく校庭の中心部（トラック内）に除草剤が散布されていたことが判明。（散布されたと思われる日時付近に、当時の3年生が理科の授業で昆虫採集を行っている。）校長に事実確認を行ったが、「除草剤の散布は用務員の方の独自の判断によるものであり、自分はその事実を把握していなかった」と返答するなど不誠実な対応であった。この時期を境に、保護者と児童の間に校長に対する不信感が広まった。

2023年には、鼓阪小全学年の児童に対し、校内地図に色分けシールを貼らせることで「鼓阪小の好きなところ・嫌いなところ」を指すワークショップが実施された。児童たちは「これは統廃合とは関係ない」と前置きをされた上でその指示に従ってシールを貼付けた

が、後に教育委員会から「新小学校の校舎は鼓阪小の子供たちの意見も反映しました」と、自分たちのこのワークショップの内容と意図がすり替えられ“材料”に使用された事実に衝撃を受けている。

子供たちの中には、「廃統合についてみんなで話したいと担任の先生に申し出たが明確な理由もなく断られた」、「新しい通学路を実際に歩いて通学路の点検をしながら通学してきましたと校長に話したところ、閉口され何も言ってもらえず“イヤな目”をされた。自分としては通学路の安全を確かめるという行為はいいことだと思っていたのに逆にとがめられたような気持ちになりショックを受けた」、「(親が) 統廃合に反対と言ったせいか、自分だけ挨拶を返してもらえなかった」など、校長をはじめとするそのほかの教師においても、児童や保護者の気持ちに寄り添うどころか、誠実に向き合うことを避け、発言を無視したりもみ消したりすることで、子供たちが統廃合について自由に話し合ったり意見を出し合ったりする機会を奪っている。「信頼していたはずの先生たちが、自分たちの気持ちや考えに向き合ってくれない」という経験が重なったことで「諦め」の感情を持つようになり、次第に発言しなくなる、という事象が子供たちの中に確実に起こっている。

上記に挙げたのは例の一部にすぎず、現在の鼓阪小は、教育の場にあってはならないことが往々にして起こっている状況にあると言わざるを得ない。学校の今後を左右する大切なこの時に、教師、児童、保護者がオープンに話し合えないようなこの状況は極めて不健全であり、即刻改善されるべきであると考ええる。

⑨地域活性化は鼓阪小学校と鼓阪地区のつながりを基礎とした地域活性化であるべき。

実行に向けて奈良市とともに進行していたはずの「鼓阪地区活性化案」は、まず大前提として鼓阪小学校ありきでの計画であり、なおかつ進行途中でその活性化についての進捗も途絶えている。鼓阪地区は世界遺産にも登録されている東大寺や正倉院をはじめとする歴史的、文化的価値の高い建造物が多く存在する地域であり、奈良市の文化・観光の要ともいえるこの地域の活性化は奈良市の活性化においても非常に重要な割合を占めている。この地域の発展なくしては奈良市の発展はなし得ないと考える。

地域活性化の拠点ともなる鼓阪小学校は、古くから東大寺や地域の協力の下、学校活動を行ってきた。通年事業でもある地域住民の方々と共に行う学校の清掃活動やペンキ塗り事業に加え、2023年10月15日には、東大寺開山良弁僧正1250年御遠忌法要において、大仏殿前広場にて鼓阪小学校児童を中心とした鼓阪地域住民や中学校吹奏楽部、和太鼓チーム、コーラスグループ、和楽器隊や演出・撮影チーム、総勢300名による奉納演奏を行った。演奏当日だけでなく、地域と学校、東大寺が一丸となって大舞台をつくりあげていくその様子を収めた動画を国内外に向けて配信している。

また、2023年は鼓阪小学校創立150周年であったことから、児童たちと東大寺で「150周年記念鼓阪小オリジナル手ぬぐい」を共同制作し(通算売上枚数約700枚/販売期間約14日間)、その制作、販売活動を通じて、地域と小学校の関係性を改めて盤石にした。

そして、毎年1・2年生の児童は、地域の有識者の方々の御協力の下、菜の花を育て、自分たちの手で脱穀・圧搾した菜種油を東大寺に奉納。

2005年に鼓阪小学校近隣(奈良公園内)の池で発見され「奈良県希少野生動植物の保護に関する条例」に基づいて「特定希少野生動植物」に指定されている日本固有亜種の魚・ニッポンバラタナゴ(絶滅危惧種)について、近畿大学と連携を取りながら保護活動を行ってきた。その活動は、「研究第一号校」としても認定され、非常に難易度が高いとされる繁

殖にも成功。現在も校内の観察池にてその保護活動を担っている。

そして、歴史的な局面からのみでなく、人権学習の場としても由緒は深く、教育の拠点としてなくてはならない場所であることは、奈良市同和教育推進センター校であると同時に奈良教育大学教職大学院連携協力校としても認定されているという事実裏づけされている。

これらは全て、「小学校」・「地域」・「東大寺」の緊密な連携によって長年着実に育まれてきた環境を礎に、子供たちだけでなく多くの市民にとっての貴重な学びや経験につながってきたという功績のたまものであることにほかならない。

こういった“この小学校だからこそ可能な取組”が、多くの人目に触れ注目度が上がってきていることをきっかけに、これから見込まれるであろう他府県、他市、ないしは国外からの子育て世代の人口流入も、徒歩で安全に通える範囲に小学校がなくなるとなれば、転入を見送り大幅に減少することが考えられる。そうなれば、さきの地元に着した地域活性化案の実行も難しくなり、また、たとえ実行にこぎ着けたとしても、活性化の中心となる肝心の若い世代や子供たちがいなければ「活性化」とは名ばかりの空疎なものになる。

それだけでなく、この文化財に囲まれた小学校をなくすことは、子供たちの文化財継承の機会を妨げるだけでなく、ともすれば継承する人材すら失うことになりかねない。地域が衰退し、よしんば民間に委託したとしても、次世代、次々世代まで永く継承していくのは困難であるのは明らかである。

「奈良を奈良たらしめるもの」が詰まっているこの地域及びこの小学校には、世界的に見ても「ここでしか実現できない」、「他に存在しない」唯一無二の魅力と特殊な可能性が無数に存在している。それは、ひいては今後の奈良市にとっても大きな可能性であるはずであり、その可能性を軸に10年後、50年後、100年後の未来を見据えた「この地域でしかできない特有の地域活性化」を行うことで、需要を喚起する強い力になると考える。全国に先駆けた地域活性化の成功例となるべく、この地域が掲げる鼓阪小学校を中心とした「鼓阪地区地域活性化計画」を進めたいと強く望む。